

環境科学会 2022 年会におけるシンポジウム企画について

年会委員会

1. シンポジウムの実施要領（概要）

- 1) 下記 8 件の企画シンポジウムを開催いたします。
- 2) オーガナイザーは、年会委員会より送付された所定の様式により、企画したシンポジウムの詳細プログラム（演題・登壇者・所属）を作成し、**2022年6月1日（水）17時（厳守）**までに年会委員会に提出してください。また登壇者全員分の発表要旨原稿（原則として 1 演題あたり A4 版 2 頁、または 1 シンポジウムで A4 版 2 頁、書式は研究発表と同じ）をとりまとめて、原稿提出締切日**（2022年7月13日（水）17時（厳守）**までに年会委員会へ PDF ファイル（camera-ready）をメール添付でお送りください。事務局では修正ができませんので、オーガナイザーは必ず印刷をして、写真や図表が不鮮明でないこと、様式に誤りがないことを確認してください。
- 3) シンポジウムの構成や当日の進行・会場運営はオーガナイザーに一任いたします。

問合せ先

公益社団法人 環境科学会 年会委員会シンポジウム担当 (E-mail: sympo(at)ses.or.jp ※(at)を@に変換してください。)

2. シンポジウムの一覧

*各シンポジウムの最新情報については、[学会ホームページ \(http://www.ses.or.jp/conference/2022conf/\)](http://www.ses.or.jp/conference/2022conf/)にて、適宜更新しご案内致します。

タイトル	シンポ-1.「気候変動政策の転換を地域主導で進めるための体制・道具・人材」
プロジェクト名	なし
公募の有無	無
オーガナイザー および連絡先	白井信雄(武蔵野大学) 増原直樹(兵庫県立大学)
趣旨・内容	気候の非常事態が露わになるなか、カーボンゼロ社会実現のためには、これまでの政策の体制や道具(方法論)の転換が必要であり、地域で転換の実践をコーディネートする気候変動政策マネジャーの育成と活躍が必要になっている。また、カーボンゼロのための緩和策とともに、適応策についても、地域への影響評価や関連施策の棚卸し段階から、より構造的な適応策に踏み込んだ実装を行う段階となっている。具体的にどのような政策の体制、道具が必要であるか、また緩和策と適応策をあわせて、地域政策を進める気候変動政策マネジャーはどのような仕事を担うべきか、どのように育成すべきか。国内外の地域の事例と試行を共有し、具体的な方策に関する意見交換を行う。

タイトル	シンポ-2.「わが国の地球温暖化対策の現状と課題」
プロジェクト名	なし
公募の有無	無
オーガナイザー および連絡先	大塚直(早稲田大学) 柳憲一郎(明治大学)
趣旨・内容	わが国の地球温暖化対策の現状と課題について、様々な角度から検討・分析する。2050年のカーボンニュートラルに向けてわが国の地球温暖化対策は待ったなしの状態にあるが、そこには多くの課題が存在する。現在の関連する法状況を確認・分析し、その課題を検討することは極めて重要なことと思われる。シンポジウムは、総論、再生可能エネルギー導入促進と地球温暖化対策推進法、省エネ及び革新的技術開発、気候変動に対する適応、CCUS について扱う。メンバーは、社会科学、自然科学の研究者、環境省の実務家で構成されており、その点においても独自性がある。

タイトル	シンポ-3.「化学物質の環境モニタリングとリスクの評価・管理手法の今後」
プロジェクト名	環境科学会「化学物質管理戦略研究会」関連企画
公募の有無	無
オーガナイザー および連絡先	小林剛(横浜国立大学) 高橋ゆかり(富山国際大学)
趣旨・内容	リスク懸念のある化学物質についてライフサイクルを通じて網羅的・体系的に管理する考え方が国際的にも求められている。国内でも化審法や化管法等の化学物質管理関連や大気・水・土壌などの環境媒体別の法制度の中でリスクに基づく管理について議論がされてきている。また近年では、事故・災害時の化学物質管理の必要性や室内汚染に伴う先天異常の懸念など新たな視点での管理の必要性も指摘されている。本シンポジウムでは、化学物質の環境モニタリング結果などを用いて、いかにリスク評価・管理すればよいか、多様な場面での現状やリスクに基づく管理を行う上での課題、関連の研究事例を紹介していただき、今後の研究の展望について議論する。

タイトル	シンポ-4.「環境汚染物質の網羅的分析手法の開発状況」
プロジェクト名	環境総合研究推進費 5G-2101「水環境中の要調査項目調査へのターゲットスクリーニング分析の実装」/環境総合研究推進費 SII-4-2「PRTR 制度における排出源管理及び環境改善把握の支援ツールの開発」/環境科学会「化学物質管理戦略研究会」合同企画
公募の有無	無
オーガナイザー および連絡先	亀屋隆志(横浜国立大学) 高梨啓和(鹿児島大学)
趣旨・内容	化学物質の包括的な管理が世界の潮流となり、化審法優先評価化学物質や水環境における要調査項目、有害大気汚染物質に該当する可能性のある物質、化管法指定物質など、数百種類以上に及ぶ汚染物質の環境リスクが懸念されている。これに対し、近年、汎用あるいは高分解能の質量分析計を用いて化学物質を網羅的に分析しようとする開発研究が環境総合研究推進費をはじめとして採択されている。本シンポジウムでは、環境分野での網羅的な質量分析手法の開発・実装研究に先駆的に取り組んできている研究者が集まり、それぞれの手法の開発状況や活用事例について情報発信を行い、課題点や限界と今後の展望などについて議論する。

タイトル	シンポ-5.「地域の脱炭素化：次世代エネルギーと公共調達の観点から考える」
プロジェクト名	環境研究総合推進費「暗示的炭素価格を踏まえたカーボンプライシングの制度設計：効率性と地域経済間の公平性を旨して」、市村清新技術財団地球環境研究助成「公共調達のデジタル化によるグリーン調達促進：自治体の脱炭素化」、旭硝子財団研究助成プログラム「再生可能エネルギー普及に向けた需要・供給サイドの研究：日独比較を通じた経済分析」
公募の有無	無
オーガナイザー および連絡先	宮本拓郎(東北学院大学) 有村俊秀(早稲田大学)
趣旨・内容	地域の課題解決や魅力向上に向けた脱炭素への取り組みについて、再生可能エネルギーと公共調達の観点から考える。研究者による研究成果やその政策的な含意の報告だけでなく、次世代電力供給に取り組む企業や公共調達のグリーン化を支援する NGO の関係者にも、それらの現状と課題について現場の視点からご報告いただく。本企画を通じて、研究者による分析と現場の視点を融合し、地域の脱炭素化における産学官連携のあり方を模索したい。

タイトル	シンポ-6.「脱炭素化に貢献するモビリティ革命のあり方をさぐる」
プロジェクト名	環境研究総合推進費「モビリティ革命が脱炭素化を実現するための条件」
公募の有無	無
オーガナイザー および連絡先	加藤博和(名古屋大学) 朴秀日(名古屋大学)
趣旨・内容	近年、CASE と呼ばれる自動車の根本的な変革や、新たなモビリティ・ツールの普及、そして ICT を活用した MaaS 等の交通モード間連携の進展といった「モビリティ革命」とも呼ばれる動きが注目を浴びている。しかし、モビリティ革命が脱炭素化に貢献しうるか否かについて、学術的・客観的な評価検討は不十分である。本シンポジウムでは「モビリティ革命が脱炭素化を実現するためにどのような施策が必要か」について、関連研究の紹介を踏まえ議論する。

タイトル	シンポ-7.「持続可能な未来都市に向けた分析・計画・実装」
プロジェクト名	環境研究総合推進費 1-2003「地域資源と地域間連携を活用した地域循環共生圏の計画とその社会・経済効果の統合評価に関する研究」ほか
公募の有無	無
オーガナイザー および連絡先	松橋啓介(国立環境研究所) 原圭史郎(大阪大学)
趣旨・内容	カーボンニュートラル、SDGs 等の観点から持続可能な未来都市の必要性が認識されており、その実現に役立つ分析・計画・実装に関する研究の重要性が増している。本シンポジウムでは、ゼロカーボンシティ、地域循環共生圏、SDGs 未来都市、フューチャーデザインの観点から、地域資源の分析、持続可能性目標・指標の検討、将来像と到達シナリオの設計、実装に向けた統合的アプローチ等に関する研究紹介を行い、持続可能な未来都市への転換を加速するために何が必要か、意見交換を行う。

タイトル	シンポ-8.「PBLとしてのSDGs活動：継続的な活動による能力開発の評価手法の検討」
プロジェクト名	なし
公募の有無	無
オーガナイザー および連絡先	杉本卓也(千葉商科大学) 中口毅博(芝浦工業大学)
趣旨・内容	<p>学生による課外活動には様々な種類があるが、近年ではSDGsと関連した活動も行われている。一方で、大学は教育研究機関ということもあり、学生が活動を通じて何を学び、何を身に着けるかといった点も重要となる。</p> <p>授業としての課題解決型学習(PBL:Project Based Learning)と学生活動の大きな違いの一つはその期間である。授業は学期毎に区切られることがあるが、学生活動は継続性のあるそれである。学生活動が継続して展開されていくことで、その過程でプロジェクト管理やコミュニケーション能力といった社会人基礎力の修得と実践の機会が複数回確保される。</p> <p>このシンポジウムでは学生による継続展開されるSDGs活動を学修機会と捉え、活動を通じた学生の能力開発について議論する。活動を継続していく過程で修得されていく能力の評価や測定手法についても議論する。</p>

タイトル	シンポ-9.「多様な学問分野における環境科学研究の最前線」
プロジェクト名	なし
公募の有無	無
オーガナイザー および連絡先	山本佳世子(電気通信大学) 岩本茂子(電気通信大学)
趣旨・内容	<p>環境の重要性が世界的に認識され、多様な学問分野で環境科学研究が行われるようになった。たとえば、工学分野では建築、土木、都市計画だけではなく情報、機械、電気などの工学諸分野でも環境科学研究が実施されている。また、様々な学問分野の複合分野、融合分野においても、環境科学研究が推進されている。以上のように環境科学研究を行う学問分野の拡大には、環境問題の複雑化・多様化に加え、世界規模での社会的・経済的な変化の影響が大きい。そこで、本シンポジウムでは以上で示した環境問題の特性を考慮し、環境科学研究が近年推進されるようになった学問分野における環境科学研究の最前線について紹介する。</p>